

第3回 大政奉還の直前、龍馬はとても忙しかった

文：京都国立博物館学芸部上席研究員 宮川禎一

京都国立博物館では「没後 150 年 坂本龍馬」という特別展を平成 28 年 10 月 15 日から 11 月 27 日まで開催する。その展示品の中に大政奉還直前の龍馬と京都の様子をうかがわせる手紙がある。龍馬が土佐の兄坂本権平に宛てたものだ。現代語風に直せば以下のようなものになる。

「(高知で家族の) 皆様とお別れした後、芸州藩の船から土佐藩の小蝶丸へと乗り換えて、須崎の港を出航し十月九日(十月六日)に大坂に到着しました。そして今朝、京都に着きました。この頃の京都や大坂の様子は以前とはずいぶんと変わっており、日々「ごてごて」としています。しかしながら「世の中は乱れようとして、実際はなかなか乱れないものだなあ」と同志の皆々と言いつつ合っているところですよ。

まずは今日まで(私が)無事であることを幸便にお知らせいたします。謹言

十月九日

梅太郎

(封上書) 上町本一丁目 坂本権平様

坂本龍馬

高知に立ち寄っていた龍馬が風雲急を告げる京都に到着したのは慶応 3 年 10 月 9 日のこと。龍馬は薩長両藩による武力倒幕計画の実行が目前に迫っていることをよく知っていた。「世の中は乱れようとして、なかなか乱れないものだ」という表現がそれだ。その流れをかわすように徳川慶喜が土佐藩提出の大政奉還策を受け入れることを二条城で表明したのはこの手紙の 4 日後のことである。10 月 9 日の上京直後も龍馬は関係者の間を奔走していたらう。土佐藩の後藤象二郎にはなんとしても大政奉還を実現するように発破をかけている。龍馬がとても忙しかった証拠がこの手紙の書き方にある。手紙下段の文字が左にうっすらと写っている。これは龍馬が巻紙を左手に握り、右手で筆を走らせた証拠だ。下段が濃いのは巻紙の下部を握っていたからだ。すなわち龍馬は机を使わずに立ったままこの手紙を書いたのだ。龍馬のほかの手紙にはこんなものはない。龍馬が忙しいのはこの時期、日本史の主役だったからだ。手紙にみえる大政奉還直前の龍馬の姿である。